

地域的特色を生かした社会科教材作成のための課題

－ 音威子府村を事例に －

金 玆 辰

(北海道教育大学旭川校)

Challenges of Developing Teaching Materials with Local Features in Social Studies － A Case Study of Otoineppu Village －

KIM Hyunjin

概 要

本稿は、音威子府村を事例に、地域的特色を生かした社会科教材作成のための課題を探ることを目的とした。音威子府村は、開拓時代から鉄道の発展と共に成長したために「鉄道の村」として呼ばれていたが、近年は、村の80%を占める山林、そしてそれを加工した木材工芸を村の産業とする「森と匠の村」を目指している。1965年以降の過疎化によって小・中学校の廃校が続き、2014年現在は「音威子府小中学校」の1校しかないが、地域的特色である工芸教育を標榜する「おといねっふ美術工芸高等学校」では、全道から多くの生徒が集まる。以前から地域的特色を生かした教育活動が小学校を中心に行われ、文化・社会的環境・自然・生活・学校・歴史の側面から地域教材を活用してきた。小学校社会科では3・4年で副読本が編纂されており、その内容は他学年や中学校社会科授業にも活用可能である。だが、今後の地域的特色を生かした社会科教材を開発するためには、小中一貫教育や社会参画の観点を取り入れる必要がある。

I. はじめに

学習活動において、各々の地域がその地域的特色を生かした授業を構想することに異議を唱える人はいないであろう。地域的特色を生かした教育活動や教材に関しては、平成10年版学習指導要領の全面実施にあたり新設された「総合学習の時間（以下、総合学習）」を中心に、数多くの先行研究がある。本雑誌『へき地教育』に掲載された論文で北海道の事例に限っても次のようなものがある。例えば吉田（2002）¹⁾は、南芽部町立磨光小学校のふるさと学習を取り上げ、総合学習におけるカリキュラムの組織原理を提案している。また、山口・小松・森田（2004）²⁾は、総合学習の一つのテーマとしてあげられている地域学習を行うために、身近でかつ北海道の主要な農産物である玉ねぎを取り上げ、家庭科の観点から児童生徒の興味と学習意欲を高めることができる教材を提案している。そして、鎌田・佐々木（2001）³⁾の指摘のように、地域的特色を生かした総合学習を考えるためには、早くから地域素材を教材化してきたへき地教育の研究結果から大きな示唆を得ることができる。

北海道ではないが、筆者もこれまでへき地・小規模校における教育活動や地域教材化に注目してきた⁴⁾。これまでも地域的特色を生かした様々な総合学習の成果が報告されているが、平成20年版学習指導要領においては、総合学習の時間が減り、各教科の比重が大きくなっている。このような中で、社会科においてはこれまで以上に地域的特色を生

かした教材開発や実践が求められていると言えよう。

そこで本稿は、音威子府村を事例に、地域的特色を生かした社会科教材作成のための課題を探ることを目的とする。そのため、まず音威子府村の地域的特色を確認した後、社会科の観点からこれまでの実践や教材を検討し、最後に今後の地域教材を作成するための課題を述べる。

II. 音威子府村の地域的特色

ここではまず音威子府村についての概要を述べた後、関連する学校教育の変遷を明らかにし、その地域的特色を示す。

1. 概要

音威子府村史（2007）によれば⁵⁾、音威子府村は上川管内の北端に位置し、北は宗谷管内中頓別町、北東は宗谷管内枝幸町、西は上川管内中川町、南は上川管内美深町に隣接している。村域は東西22.2km、南北18.6kmであり、総面積275.64km²である⁶⁾。総面積の86%を山地が占め、その大部分は北海道大学の研究林と道有林である。

図1のように、天塩川は音威子府市街地の西で、それまでの北流から西流に転じており、そこで支流である音威子府川が北から合流している。JR宗谷線は常に天塩川の右岸に沿って通じている一方、国道40号は北流する天塩川の右岸に、西流する天塩川の左岸に沿って通じている。交通に

については、音威子府駅に1日3往復のJR特急列車が停車し、旭川まで1時間35分、稚内まで1時間55分である。自動車を利用する場合は、国道40号を経由し旭川までは2時間30分、稚内まで2時間程度である。バスは旭川までは道北バスで2時間40分、浜頓別を経由し稚内までは宗谷バスで4時間30分かかる。



図1 音威子府市街地マップ
 (「Map25000pdf」よりダウンロードしたもの)

図2のように、2007年から現道の交通事故低減及び雪崩特殊通行規制区間の解消による道路交通の定時性や安全性の向上を目的とした、音威子府村字音威子府から中川町字誉に至る延長19.0kmのバイパス事業が行われている⁷⁾。この音威子府バイパスは2010年代末に開通する予定であり、今後稚内までの交通便がより早くなる。

音威子府という地名は、濁りたる泥川、漂流木の堆積する川口、または切れ曲がる川尻を意味する⁸⁾。音威子府村史(2007)によれば⁹⁾、この地名は音威子府川から由来するもので、アイヌ語の「オ・トィネ・プ」に漢字の音を当てたものである。1912年に音威子府駅が設置されてから使われ始めたが、それ以前は「音江根布」が用いられていたこともある。

現在の音威子府村という名は、1963年に改称されたものである。音威子府村の歴史を簡単に見ると、1903年に国道が咲来までできてから、1904年に咲来への入植が始まり、1906年以降本格化する。1916年には常盤村として中川村から分離独立する。当時役場は咲来市街地にあった。しかし、1912年から鉄道が開通したことで音威子府市街地が発展する。1923年の地区別戸口数は音威子府が223戸・1255人、咲来が75戸・303人で、音威子府が咲来を上回っていた¹⁰⁾。その結果、1925年に役場が音威子府市街地へ移転され、現在に至る。昭和初期の人口は1935年(昭和10年)の4,121名が最高であるものの、約3,500程度で横ばい状態であった¹¹⁾。部落別の人口をみれば、音威子府市街地が約1,000人程度である一方、咲来地市街地は約400人程度に留まっていた。

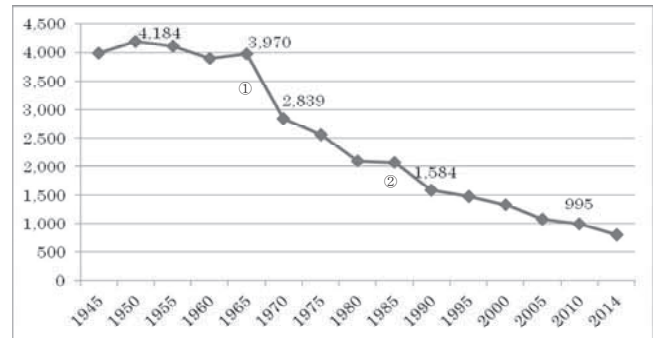


図3 戦後の村内人口推移
 (2014年は住民基本台帳、その他は国勢調査のデータを基に筆者作成)



図2 音威子府バイパス事業計画図
 (北海道開発局(2010)、「一般国道40号音威子府バイパス—再評価原案準備説明資料—」、p.2より)

図3は戦後の人口推移を示したものである。特に、顕著な人口減少をみられたのは、①1960年代後半、②1980年代後半である。戦後音威子府村においては、樺太や満州からの引揚者によって一時的に人口が増加し、1950年代には4千人を超え、1960年代前半までは3千人を上回っていた。しかし、①3,970人であった1965年の人口は、1970年には2,839人まで大きく減った。この傾向は、戦後のベビーブームの世代が、1960年代に中学・高校の卒業期を迎え、一気に都市へ流出したことが原因であり、音威子府村だけではなく、当時高度経済成長期であった日本全国の農山漁村で

もみられるものである。高度経済成長に伴い、農山漁村地域から都市地域に向けて若者を中心として大きな人口移動が起こり、都市地域においては人口の集中による過密問題が発生する一方、農山漁村地域では住民の減少により地域社会の基礎的生活条件の確保にも支障をきたすような、いわゆる過疎問題が発生する。これに対処するため、1970年に議員立法により10年間の時限立法として過疎地域対策緊急措置法が制定された¹²⁾。

その後も村の人口減少は続いたが、大幅減少したのは②1980年代後半である。その理由は、1989年に起きた天北線の廃止による国鉄関係者の転出である¹³⁾。「鉄道の村」として呼ばれていた音威子府村は、人口の多くを国鉄関係者が占めていた。村が大きく発展したのは、1922年に宗谷線（後の天北線）の全通、1926年に天塩線（後の宗谷本選）の全通で、両線の分岐点に位置する音威子府駅の重要性が増加してからである¹⁴⁾。音威子府村史（2007）によれば¹⁵⁾、1955年の職業別戸比率は、農業(32.2%)・運輸通信業(29.2%)・製造業(9.2%)・公務自由業(6.5%)・サービス業(6.2%)・御小売業(4.2%)・建築業(1.7%)の順である。一方、『小学校社会科副読本おといねっふ』（2002）に掲載されている1998年の職業別人口の比率をみると、サービス業(29%)・建築業(25%)・農業(15%)・御売/小売業(9%)・公務(9%)・運輸通信業(7%)・製造業(4%)¹⁶⁾の順である。このような職業別比率の変化をみると、天北線の廃止により村の様子が大きく変わったことがわかる。

1970年以降10年ごと村の発展のため長期の総合開発計画が策定されており、1981年から1990年までの第2総合計画において、「森と匠の村」の建設を目指すようになった。

2. 学校教育

2014年現在音威子府村における学校教育施設としては、幼児教育を担当する「幼児センター」、小中一貫教育を行う「音威子府小中学校」、美術や工芸を専門とする「おといねっふ美術工芸高等学校」がある。表1は音威子府における学校の変遷を示したものである。

まず、幼児教育の変遷を見てみよう¹⁷⁾。1972年に音威子府村立幼稚園が音威子府小学校旧校舎を園舎として開設された。開園当時は5歳児の1年保育であったが、1977年からは4・5歳児の2年保育となり、青少年会館に移動、併置された。さらに、1998年に新築させた幼児センターに幼児園と保育所を一元化し、2歳から5歳までを見通した保育を行うようになり、現在に至る。

次に、小・中学校の変遷である。音威子府で学校が始まったのは、1907年に開設された①咲来簡易教育所であり、1908年に咲来尋常小学校になった。その附属機関として、1909年に②物満内特別教授所、1913年には③音威子府特別教授場が開設され、1915年に音威子府尋常小学校、1917年に物満内尋常小学校に昇格した。さらに、1917年に開設された④上音威子府特別教授場が1922年に尋常小学校に、1918年に開設された⑤常盤特別教授所が1920年に尋常小学校となっ

た。また、咲来尋常小学校と音威子府小学校に現在の中学校教育に当たる高等科が設置され、⑦咲来尋常高等小学校（1918年）、⑧音威子府尋常高等小学校（1922年）となる。

戦後、6・3・3制の新教育がスタートし、村にあった5つの国民学校は、①咲来小学校、②物満内小学校、③音威子府小学校、④上音威子府小学校、⑤常盤小学校となり、⑧常盤中学校と⑦同咲来分校が設立認可された。1949年には常盤中学校が⑧音威子府中学校に改称、咲来分校は⑦咲来中学校となった。

戦後一時的に開拓入植者が増え、1957年に⑥上物満内分校が開校され、1959年に上物満内小学校となった。1961年には②物満内小学校が箴島小学校に改称され、⑥上物満内小学校が物満内に移転するようになった。1963年には上物満内小学校が物満内小学校に改称された。こうして1960年代半ば頃には、①咲来小学校、②箴島小学校（旧物満内小学校）、③音威子府小学校、④上音威子府小学校、⑤常盤小学校、⑥物満内小学校（旧上物満内小学校）、⑦咲来中学校、⑧音威子府中学校（旧常盤中学校）という一番多い8校の小・中学校があった。

前述したように村の人口が大きく減少したのは1965年以降であり、次第に1970年代から1980年代前半までに廃校が続いた。1972年に⑤常盤小学校、1975年に④上音威子府小学校、⑥物満内小学校、1978年に②箴島小学校、1982年に5校も廃校することになった。村で初めて開校された①咲来小学校も児童数の減少で1991年から山村留学制度を導入してきた。1991年から2002年までの咲来小学校児童数の中で地元および山村留学の児童数を示すと以下のようである¹⁸⁾。

年	総児童数	地元	山村留学
1991年	24名	19名	5名
1992年	25名	19名	6名
1993年	27名	21名	5名
1994年	27名	22名	5名
1995年	25名	16名	9名
1996年	22名	13名	9名
1997年	19名	11名	8名
1998年	16名	11名	5名
1999年	13名	10名	3名
2000年	19名	12名	7名
2001年	19名	9名	10名
2002年	19名	9名	10名

しかし、この100年の歴史を持つ①咲来小学校も2007年に廃校した。さらに、音威子府小学校も開校100年になる2013年を最後に、現在音威子府中学校と併置され、音威子府小中学校になっている。

最後に高等学校について見てみる¹⁹⁾。戦後間もなく1950年に名寄農業高校音威子府分校が村の働く若者のために4年制の昼間定時制高校として開校し、1953年には音威子府高校として独立した。当時は普通科の職業に関する科目と

表 1 音威子府における学校の変遷

1907年	咲来簡易教育所が設置される。①
1908年	咲来簡易教育所が咲来尋常小学校に昇格する。①
1909年	咲来簡易教育所附属物満内特別教授所が開設される。② 物満内特別教授所が物満内教育所に昇格する。②
1912年	咲来尋常小学校附属音威子府特別教授場が開設される。③
1913年	咲来尋常小学校附属音威子府特別教授場が音威子府尋常小学校に昇格する。③ 物満内教育所が物満内尋常小学校に昇格する。②
1915年	音威子府尋常小学校附属上音威子府特別教授場が開設される。④ 咲来尋常小学校に高等科を設置し、咲来尋常高等小学校となる。⑦
1917年	咲来尋常高等小学校附属常盤特別教授所が開設される。⑤ 咲来尋常高等小学校附属常盤特別教授所が常盤尋常小学校に昇格する。⑤
1918年	上音威子府特別教授場が上音威子府尋常小学校に昇格する。④ 音威子府小学校に高等科を設置し、音威子府尋常高等小学校となる。⑧
1920年	<u>音威子府、咲来に青年訓練所が設置される。</u> <u>音威子府実践女学校が設置される。</u>
1922年	<u>咲来実科女学校が設置される。</u> <u>音威子府、咲来の青年訓練所、女学校を改組、青年学校となる。</u>
1926年	各尋常小学校が国民学校に改称される。
1928年	各国民学校が小学校に改称される。
1935年	<u>常盤中学校、同咲来分校が設立認可される。⑦・⑧</u>
1941年	<u>常盤中学校が音威子府中学校に改称、同咲来分校が咲来中学校となる。⑦・⑧</u>
1947年	<u>名寄農業高等学校音威子府分校が開校される</u>
1949年	<u>音威子府高等学校が独立認可される。</u>
1950年	物満内小学校上物満内分校が開校される。⑥
1953年	上物満内分校が上物満内小学校となる。⑥
1957年	物満内小学校が箆島小学校に改称される。②
1959年	上物満内小学校が物満内に移転する。⑥
1961年	上物満内小学校が物満内小学校に改称される。⑥ 常盤小学校が廃校になり、咲来小学校に統合される。⑤
1963年	<u>音威子府村立幼稚園が開設される。</u>
1972年	上音威子府小学校が廃校になり、音威子府小学校に統合される。④ 物満内小学校が廃校になり、箆島小学校に統合される。⑥
1975年	箆島小学校が廃校になり、音威子府小学校に統合される。②
1978年	<u>音威子府高等学校が工芸・インテリア実習を採択する。</u>
1982年	<u>咲来中学校が廃校になり、音威子府中学校に統合される。⑦</u>
1984年	<u>音威子府高等学校が全日制の工芸科に転換する。</u>
1987年	<u>音威子府高等学校定時制課程が閉課となる。</u>
1991年	咲来小学校山村留学制度が始まる。①
1997年	<u>幼児センターが新設され、幼稚園と保育所が一つになる。</u>
2002年	<u>音威子府高等学校がおといねっふ美術工芸高等学校と改称される。</u>
2007年	咲来小学校が廃校になり、音威子府小学校に統合される。①
2014年	音威子府小学校と音威子府中学校が併置され、 <u>音威子府小中学校</u> になる。

(注)点線は幼稚園，①～⑥は小学校，⑦・⑧下線は中学校，二重下線は高等学校を指す。

(『音威子府村史一下巻』(2007)より筆者作成)

して製図・機械・自動車一般という工業科目が設けられていた。特に自動車一般は運転免許を取得できることで生徒に魅力ある授業であった。しかし、運転免許取得試験の方法が変わり、授業の中で運転免許を取得できなくなり、1975年に自動車一般の科目が廃止された。さらに、生徒の全日制志向が強まり、定期制への志願者が減少し続く中で、工芸教育による学校改革を試みるようになった。1978年に芸術科目としての工芸、職業科目としてのインテリア実習を採択し、授業を行った。さらに、寄宿舎を設置して生徒を広く北海道全域から募集するようになった。ついに1984年には全日制の工芸科に転換され、定時制課程が閉課となる。

以上、音威子府村における学校の変遷を述べた。小中学校の衰退が目立ち、開拓時代以降各地区にあった小学校や咲来にあった中学校は廃校になって、現在は音威子府市街地にある小中学校1校のみになっている。一方、地域的特色を生かし、工芸教育に力を入れた高等学校の場合は、過疎化による廃校の危機を乗り越えようとしている。

Ⅲ. 地域的特色を生かした社会科教材の検討

ここでは小学校教育を中心にこれまでの地域的特色を生かした事例教材を分析した後、新たな地域教材の可能性を探る。ここで取り上げる事例教材は、『平成4・5年度上川教育局研究指定実践学校研究紀要』(1993)²⁰⁾、『小学校社会科副読本おといねっぶ』(2002)の2つである。

1. 『平成4・5年度上川教育局研究指定実践学校研究紀要』

音威子府小学校は、平成4・5年度の2カ年にわたり上川教育局指定の研究実践学校として、地域的特色を生かした教育を行った。中心となった教科は生活科と理科であるが、地域の豊かな環境を活用した具体的な活動は社会科にとっても大いに参考となる。そこで、その研究成果をまとめた『平成4・5年度上川教育局研究指定実践学校研究紀要』(以下、『研究紀要』とする)を分析し、地域的特色を生かした社会科教材の課題を明らかにする。

「意欲的に課題をとらせ最後までやりぬく子供をめざして-地域の素材を生かした教育活動の工夫-」という研究主題で行った本実践において、地域素材を教材化することが第一の研究内容として取られている。そのため、「(1)地域の素材を教材化する意義を明らかにする」、「(2)手順を決める」、「(3)教材化可能な素材にはどんなものがあるか大まかに分類を考える」、「(4)地域の素材を洗い出す」、「(5)地域の素材をどんな教科でどのような教材化が可能かを探る」、「(6)地域の素材を教育課程に位置づける基本のおさえを三領域ごとに行う」、「(7)地域の素材を生かした年間指導計画、単元指導計画の作成に向けて取り組む」という手順を設けている²¹⁾。

特に(3)地域素材を分類するためには、①文化、②社会的環境、③自然、④生活、⑤学校、⑥歴史、6つの項目を設けている²²⁾。具体的に見ると、①文化では文化財・工

芸・地域行事・遊び、②社会的環境では諸施設・人材、③自然では地形・気候条件・動植物・昆虫、④生活では特産物・伝統工業・交通・産業、⑤学校では校舎内・校舎外・学校行事、⑥歴史では歴史・遺跡・言い伝えに関連するものが地域素材として挙げられる。続く(4)の段階では、6つの分類項目に従い、実際の音威子府の地域素材が挙げられている。それらをさらに各教科に整理する作業が(5)の段階である。この段階で得られた社会科における可能な地域教材化の方向性が、表2である。

(6)教育課程に位置づける基本のおさえとして、社会科は「地域の人々の暮らし、産業、文化財、歴史などの教材化」を図ることを基本としている²³⁾。これは表2に挙げられた地域素材が、②社会的環境、④生活、⑥歴史に集中していることからわかる。

図4は生活科と理科の成果をさらに発展させた「80周年、開拓の歴史、人と自然」という総合学習の様子である²⁴⁾。昔の遊びの①文化や古老の話や⑥歴史など、社会科教材として利用することも可能である。

表2 社会科における地域素材の教材化

地域素材	社会科
②社会的環境：北大演習林、音威富士スキー場、役場(総務課・住民課・産業課・建築課・振興課・教育委員会)、村議会、林務署、消防署、派出所、中島公園、村営野球場、公民館(大ホール・調理室・和室・図書室)、農協、開発建設部、郵便局、音威子府病院、歯科医院、音威子府高等学校、音威子府中学校、音威子府幼稚園、咲来小学校、商工会議所、山村球場・広場、天塩川温泉 ④生活：村政、選挙	3・4年「公共施設」「公共団体の役割」 6年「村政」
④生活：鉄道(JR駅を中心に)、国道、道道、村道、橋(天塩大橋など)	3・4・5年「交通」
④生活：商店街、山菜工場、でんぶん工場、佐藤林業、農家、酪農家、鉄道(JR駅を中心に)、音威子府そば、ワラジ作り、木工作品、マープリント、音威子府羊羹	3年「商店街」「地場産業」 5年「農業」、「酪農」 「伝統工業」
⑥歴史：土器などの遺跡、昔の衣食住、開拓・入植の歴史、地名の由来、音小の歴史、民具、古老の話	4年「地域の文化、発展、先人の働き」 6年「歴史」

(『研究紀要』(1993)、pp.21-24を基に筆者再構成)

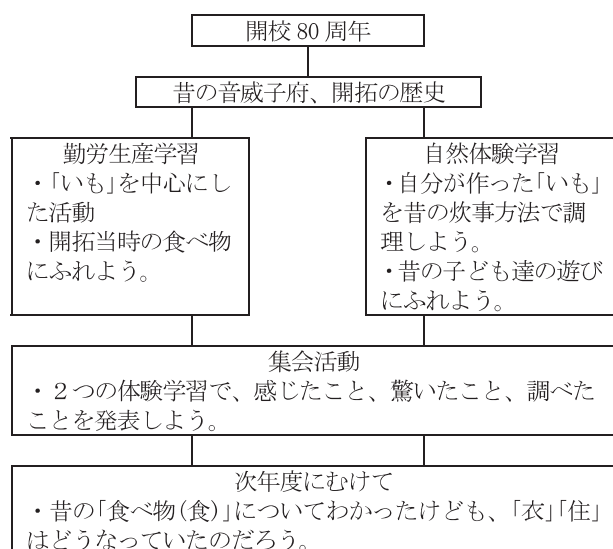


図4 総合学習「80周年、開拓の歴史、人と自然」活動計画
『研究紀要』(1993)、p.110を基に筆者再構成)

2. 『小学校社会科副読本おといねっぶ』(2002)

2002年に平成10年版学習指導要領に合わせて『小学校社会科副読本おといねっぶ』(以下、『副読本』とする)が作成された。この『副読本』は音威子府小学校と咲来小学校、両校の児童が使用するもので、執筆編集を担当した音威子府教育研究会小学校社会科副読本編纂委員会には両校の教員をはじめ、元教員、音威子府中学校の教員が関わっている。

表3は、前述した『研究紀要』の地域素材分類項目を基に『副読本』の内容を分析したものである。まず、『研究紀要』(1993)において挙げられた社会科の地域素材に(表2)比べ、神社や祭り、スキー大会などの①文化や天塩川、音威富士などの③自然を含め、6の項目全ての地域素材が社会科教材として扱われている。以下は①文化および③自然項目に関連する『副読本』の叙述例である。

①文化に関連する叙述例

また、『役場』と『商工会』がきょう力して、『ふるさとまつり』をひらいて村のよいところを村民やほかの町の人にも知ってもらうように工夫しています。(「2. 見直そうわたしたちのくらし」、p.28)

大人から子どもまで楽しめる「冬を楽しむ集い」や村外からも多くの人が集まるクロスカントリースキー、アルペンスキーの大会などがあります。(「4. わたしたちのくらしとまち」、p.52)

③自然に関連する叙述例

学校の近くには、パンケサックル川とパンケサックル川が流れています。(「1. 見つめようわたしたちのまち」、p.10)

村の中央には平らな土地があり、南の方には小高い土地が広がっています。また、村の南から北へ雄大な天塩川が流れ、いくつかの川が合流しています。周りにはスキー場のある音威富士をはじめとした山林にかこまれています。(「4. わたしたちのくらしとまち」、p.45)

音威子府には、大きなダムはありませんが、森林がダムのやくわりをはたしてきました。音威子府の山は、わたしたちの大切な水源林なのです。(「6. くらしの中の水とごみ」、p.87)

表3 『副読本』における地域素材の分析

単元	地域素材
1. 見つめようわたしたちのまち	①文化：神社 ②社会的環境：役場、駐在所、中島公園、中島球場、トレーニングセンター、山村都市交流センター、スキー場、公民館、高齢者生活福祉センター、郵便局、音威子府高等学校、音威子府中学校、保育所、幼稚園、咲来小学校、消防会館、生きがいセンター、生ゴミコンポスト、天塩川温泉 ③自然：パンケサックル川、パンケサックル川 ④生活：国道40号線、駅、商店、ガソリンスタンド・ドライブイン、農畜産物加工センター、山菜工場、農機具整備工場、麦乾燥調製施設 ⑥歴史：咲来小学校旧校舎跡地
2. 見直そうわたしたちのくらし	①文化：ふるさとまつり、花火大会 ②社会的環境：役場、商工会、美深農協音威子府、郵便局、信用金庫 ④生活：商店街、千見寺商店、宇佐見商店、杉本商店、小家商店、ハラデンキ、コンビニエンス・ストア
3. 村の人たちと仕事	②社会的環境：役場、病院、 ④生活：山菜工場、そば工場、農家、酪農家
4. わたしたちのくらしとまち	①文化：冬を楽しむ集い、クロスカントリースキー・アルペンスキー大会 ②社会的環境：公民館(図書室・大ホール・会議室・研修室・調理実習室) ③自然：天塩川、音威富士、生き物(キタキツネ・エゾシカ・ヤマメ・エゾリス) ④生活：林業、農業(畑作)、酪農、アンデュープ生産組合、除雪 ⑤学校：体育館
5. 安全なまちづくり	②社会的環境：駐在所、交通安全指導員、消防支署、消防施設(防水水槽、消火栓)、消防団 ④生活：横断歩道 ⑤学校：学校の消防施設
6. くらしの中の水とごみ	②社会的環境：水道係、下水道、浄水場、浄化センター、森林、ごみ収集車 ③自然：パンケサックル川、島見川、天塩川、森林(水源林) ④生活：水道、ゴミステーション ⑤学校：学校の水道のじゃ口 ⑥歴史：水道・下水道ができるまで
7. 村の人たちと仕事	①文化：常盤神社、八幡神社、ふるさとまつり、盆踊り、天塩川シンポジウム ②社会的環境：公民館、橋、堤防 ③自然：天塩川、水害 ⑥歴史：学校の歴史、村の歴史(開拓)、昔の道具、松浦武四郎、アイヌの人々、砂澤ビッキ、アイヌ語の地名

(筆者作成)

①文化と関連した「ふるさとまつり」は、「7. 村の人たちのくらしのうつりかわり」単元においては「八月に開かれる『ふるさとまつり』。わたしたちも楽しく参加しています」と言及されている。この「ふるさともまつり」は元々農業まつりとして行われていたが、1981年から産業まつりとして変わって、「森と匠の村」としての地域振興を目指すものである²⁵⁾。③自然については、森林と川を中心とした説明が中心となっており、関連して様々な生き物や水害なども記述されている。

また、『研究紀要』(1993)と比べ、②社会的環境に関する地域素材の変化が見られる。関連する『副読本』の叙述例は以下のようなものである。

②社会的環境に関連する叙述例

○じゃがいも・・・でんぷん工場(咲来地域)がなくなってからは、ほとんどが食べるために作られています。商品にならないものは、剣淵町の工場です。でんぷんになります。(「3. 村の人たちと仕事」、p.41)

わたしたちの村は、そばの産地として有名です。そばが本格的につくられはじめたのは、今から約10年前です。(「3. 村の人たちと仕事」、p.35)

音威子府では、家庭からのよごれた水をしょうりすするために、平成9年から下水道をつくりはじめました。平成11年にはじょう化センターが完成しました。じょう化センターは、よごれた水をきれいにして天塩川に流す役割をはたしています。そして平成13年に、全長6キロメートルの下水道が完成しました。(「6. くらしの中の水とごみ」、p.88)

『研究紀要』(1993)では「いも」をテーマとして総合学習が行われるほど地域の代表的な作物であったが、1995年に咲来地域のでんぷん工場がなくなり、耕作が減っている²⁶⁾。一方、そばは1988年に小麦との輪作として始まったが、1991年には作付面積が飼肥作物を除く畑作物中で首位になった²⁷⁾。また、下水道や浄化センターなど村の発展に伴う社会的環境の変化も見られる。関連して、『研究紀要』(1993)の地域素材ガイドマップである図5と『副読本』(2002)の地域素材が描かれた絵地図の図6を比較すれば、1990年代の村の発展様子を確認することが可能である。

次に、②歴史に関する地域素材である。「7. 村の人たちのくらしのうつりかわり」単元においては学校や開拓、水害など村の歴史を中心に叙述されている。『研究紀要』(1993)で挙げられている「土器などの遺跡」に関する『副読本』の叙述はなく、代わりに「松浦武四郎」、「アイヌの人々」に関して以下のような叙述がある。

⑥歴史に関連する叙述例

北海道がまだ「蝦夷地」とよばれていた1957年、たんけん家の松浦武四郎が、オニサツベ(今の箆島の鬼刺川の近く)をおとすれました。松浦武四郎が描いた『天塩日誌』という日誌では、松浦武四郎が音威子府に泊まったときに、『北海道』の名前を思いついたとされています。(「7. 村の人たちのくらしのうつりかわり」、p.117)

昔から北海道には、多くのアイヌの人々が暮らしています。こ

の音威子府村にもアイヌの人々が、天塩川の近くを中心に住んでいたことがありました。(「7. 村の人たちのくらしのうつりかわり」、p.118)

最後に、社会参画の観点を取り入れた内容が見られる。『研究紀要』(1993)の「いも」をテーマとして総合学習でも、地域の人々を学校に招き話を聞いたりする場面があったが、さらに『副読本』(2002)は児童が調べた地域の内容を学校だけではなく村の人々に伝えるために「天塩川シンポジウム」を開催する以下の内容がある。

天塩川シンポジウムを開こう

わたしたちは、それぞれの班でまとめたことを発表することにしました。

そこで、調べたときにお世話になった人や、村の人たちに来てもらうことにしました。そして、発表会に来てくれた人たちに参加をよびかけて、「天塩川シンポジウム」を開くことにしました。

シンポジウムでは、発表会の感想やこれからの天塩川と人々のくらしについて、みんなで話し合います。(「7. 村の人たちのくらしのうつりかわり」、p.124)

上記の「天塩川シンポジウム」は、学校と地域との連携を図る児童の社会参画が見られる場面である。

IV. 地域的特色を生かすための社会科教材の課題

これまで述べた音威子府村における地域的特色、先行地域教材の検討を踏まえ、今後地域的特色を生かした社会科教材を開発するための課題について述べる。

まず、小中一貫教育としての社会科教材を開発することが必要であることを指摘できる。開校1年目である音威子府小中学校の2014年度学校要覧においても、「生き生きと学び、生活する学校づくり」を一番目の経営の重点として挙げ、中でも「小中9年間の見通した一貫校的な教育」を推進することに力を入れている。したがって、小学校と中学校が併置されている現在、小中一貫教育として社会科を考えることが必要である。これまでは小学校を中心として地域素材を用いられることが多かったが、先行地域教材を検討する中で、数個であるが中学校社会科の授業で適用できるものが見られる。例えば、縄文時代の遺跡や遺物、松浦武四郎の人物学習を通じた幕末の北方探検、近代の学校教育や北海道の開拓などは、中学校歴史的分野においても用いることができる地域教材である。

次に、社会参画の観点を取り入れた社会科教材を開発することが必要である。音威子府小中学校の2014年度学校要覧を見れば、4番目の経営の重点として「開かれた学校づくり」を挙げており、そのために「地域の人材などの活用や幼高との連携教育の趣旨を生かした授業」や「地域行事への参加・協力や地域との連携の探求」などが挙げられている。近代に入り、学校はその地域のセンターとしての役割を果たしてきたが、少子化や過疎化が急速に進む今こそ、

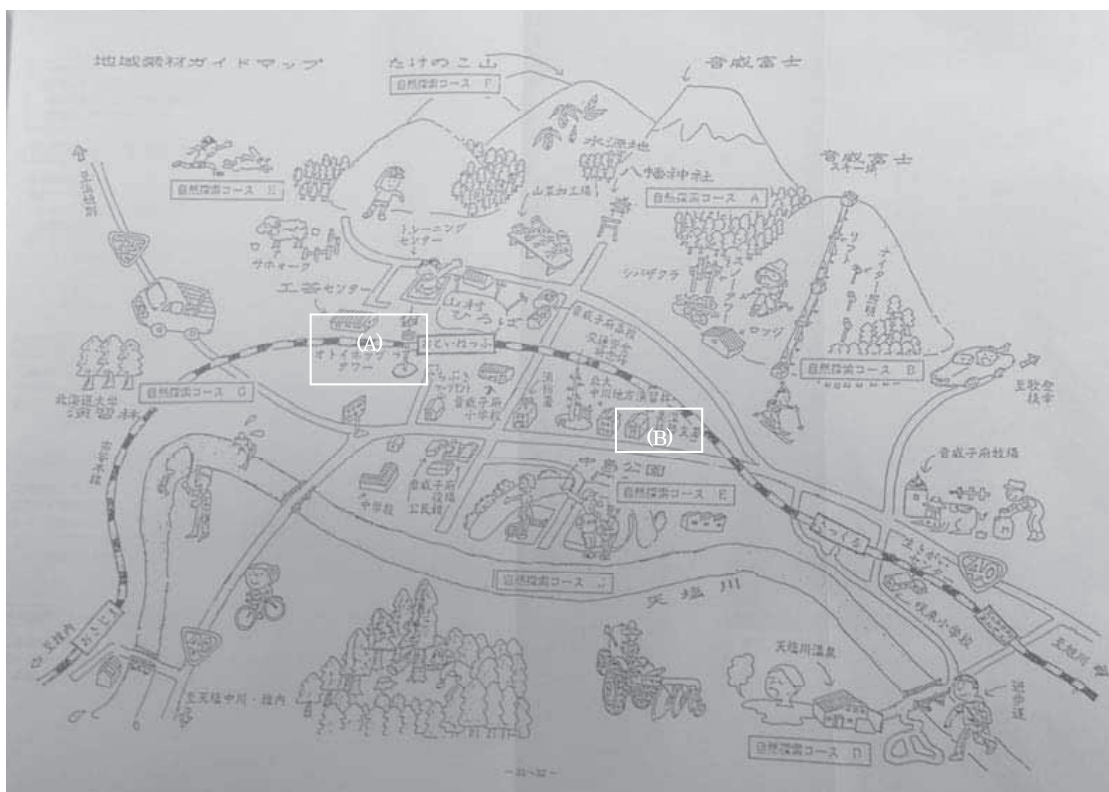


図5 『研究紀要』(1993)における地域素材ガイドマップ

*1990年以降変化したもの：(A)オトイネツタワー(1980年建立→1990撤去) (B)美深道有林管理センター音威子府支署(1995閉鎖)

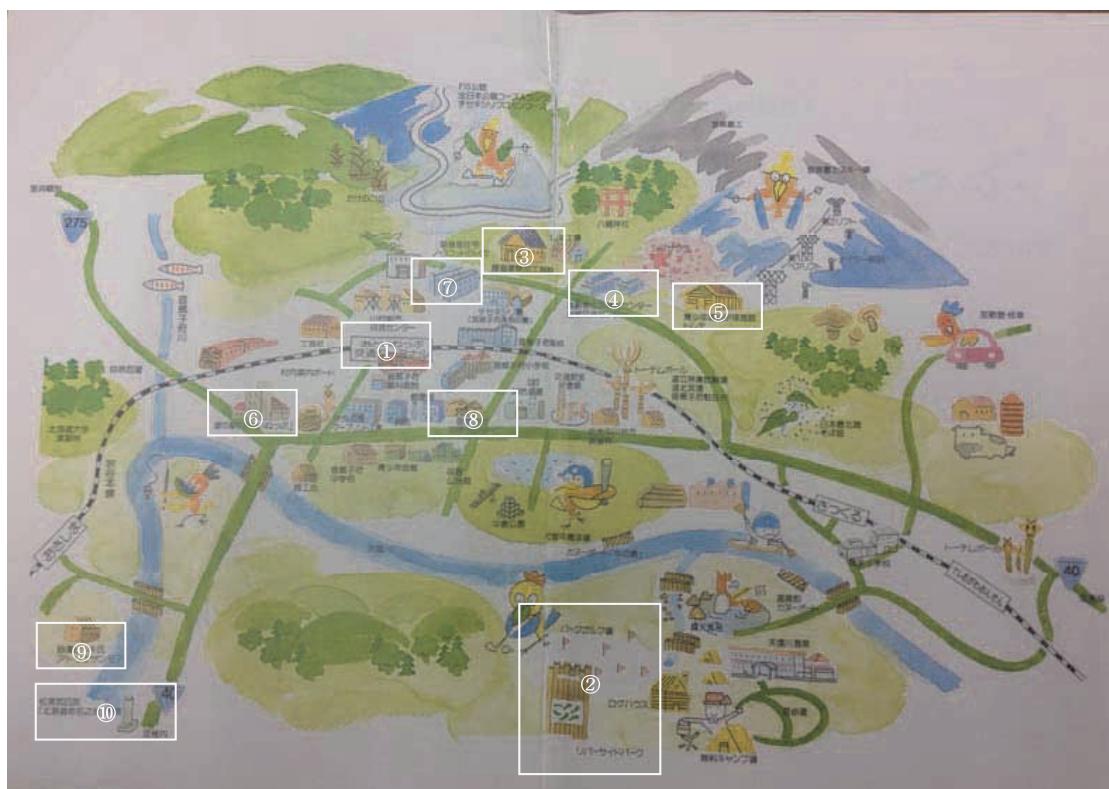


図6 『副読本』(2002)における地域マップ

*1990年以降変化したもの：①音威子府交通ターミナル(1990) ②リバーサイドパークゴルフ場(1992) ③農畜産処理加工施設(1992)
 ④高齢者生活福祉センター・地域交流センター(1993) ⑤青少年宿泊研修施設トムテ(1993) ⑥道の駅おといねっぶ(1993) ⑦単身者住宅(1993)
 ⑧幼児センター(1997) ⑨BIKKYアトリエ3モア(1978)→エコ・ミュージアムあさじま(2002) ⑩松浦武四郎「北海道命名之地」木標(1995, 2011)

より地域に開かれた、地域の人材を活用する視点を押し出す必要がある。その際、地域の人を学校に呼び込むだけでなく、児童生徒が積極的に地域に出ていく、社会参画の観点を取り入れることが必要である。

【注】

- 1) 吉田正生 (2002)、「ふるさと学習」の可能性－南芽部町立磨光小学校の事例から－、『へき地教育研究』、第57号、pp.35-50。
- 2) 山口江利子・小松恵美子・森田みゆき (2004)、地域特性を生かした総合学習教材(染色)の検討、『へき地教育研究』、第59号、pp.59-100。
- 3) 鎌田浩子・佐々木宰 (2001)、へき地教育に学ぶ「総合的な学習」の教材開発の構想、『へき地教育研究』、第56号、pp.47-54。
- 4) 金 玆辰 (2008)、島嶼地域の小規模校における集合学習の成果と課題－愛媛県忽那諸島の小学校を事例に－、『地域と教育』筑波大学博士課程人間総合科学研究科学校教育学専攻「社会科教育学演習I」調査報告, 第7号, pp.39-52。金 玆辰 (2009)、小・中学校における韓国学習の意義－忽那諸島の児童・生徒の認識を手がかりとして－、『地域と教育』筑波大学博士課程人間総合科学研究科学校教育学専攻「社会科教育学演習I」調査報告, 第8号, pp.95-107。
- 5) 音威子府村史編纂委員会 (2007)、『音威子府村史－上巻(本編)』、音威子府村、p.3。
- 6) 音威子府村ホームページでは、「北海道で一番小さな村」をアピールしている。<http://www.vill.otoineppu.hokkaido.jp/>
- 7) 北海道開発局 (2010)、「一般国道40号音威子府バイパス－再評価原案準備説明資料－」、p.1。
- 8) 音威子府村ホームページの村の概要 <http://www.vill.otoineppu.hokkaido.jp/about/gaiyou.html>
- 9) 音威子府村史編纂委員会 (2007)、p.50。
- 10) 同上、p.184。
- 11) 同上、pp.235-236。
- 12) 総務省「過疎対策の沿革について」http://www.soumu.go.jp/main_content/000288542.pdf
- 13) 音威子府村史編纂委員会 (2007)、p.378。
- 14) 同上、p.668。
- 15) 同上、p.294。
- 16) 音威子府教育研究会小学校社会科副読本編纂委員会(2002)、『小学校社会科副読本おといねっふ』、音威子府教育委員会、p.32。
- 17) 音威子府村史編纂委員会 (2007)、pp.774-776。
- 18) 同上、p.788。
- 19) 音威子府村史編纂委員会 (2007)、pp.815-829。
- 20) 音威子府村立音威子府小学校 (1993)、『平成4・5年度

上川教育局研究指定実践学校研究紀要「意欲的に課題をとらせ最後までやりむく子供をめざして－地域の素材を生かした教育活動の工夫－』。

- 21) 同上、pp.19-20。
- 22) 同上、p.20。
- 23) 同上、p.26。
- 24) 同上、pp.109-120。
- 25) 音威子府村史編纂委員会 (2007)、p.427。
- 26) 同上、pp.497-500。
- 27) 同上、p.502。